



## ちひろ・あそびの情景

●2008年5月16日(金)～7月8日(火)

元気に駆け回る子ども、夢中になって絵を描く少女……。いわさきちひろは子どもたちが生き生きと遊ぶ姿を数多く描いています。本展では、ちひろが子どもの遊びの情景を描いた作品を展示し、制作の根底にあったちひろの思いを探ります。**母のまなざしと画家の眼— 絵本『みんなでしようよ』**

初めて手がけた絵本『ひとりのできるよ』（「こどものとも」12号）が出版された1957年、ちひろは続けて2冊目の絵本『みんなでしようよ』も制作しています。登場する子どもたちは、一緒に花を眺めたり、歌に合わせて遊戯をしています。一人一人異なる表情や仕草を見せています。「この子にはどんな服が似合うかしら」などと、つぶやいていることがあったというちひろ。この絵本でも、それぞれの子どもに個性を見出し、描き分けていたことがわかります。「大きな時計をつくる子どもたち」（図3）の中の、鳥を指しながら小首を傾げてこちらを振り向いている男の子は、当時、同じ年頃だったちひろの一人息子の姿と重なります。ちひろはよく、自宅周辺で遊ぶ息子やその友達の姿を写真に撮ったり、スケッチしたりしていました。木登りや相撲など、全身全霊を傾けて遊ぶ子どもたちを、画家としての鋭い洞察力と、母としての温かなまなざしを持って捉え、描い

ていたことが伺えます。

**教科書に託した願い—**

「しょうがくしゃかい」 たろうとはなこ」

この作品は、文部省（当時）による検定がある教科書とは違い、検定のない社会科の副読本として作られました。近隣や学校、家庭など、子どもを取り巻く地域社会について楽しく学んでもらおうと、教科書という既成概念に囚われることなく、「絵本作り」を意識して制作されました。「地図を見る先生と子どもたち」（図4）では、転んで怪我をしたたろうと一緒に、先生と生徒たちが怪我をしたことのある場所に印をつけている場面が、巧みなデッサンで描かれています。かつて、わが子の授業参観で、教科書の絵が繰り返し、隅々まで観察され、話し合われている光景を見たちひろは、「次のページへ、次のページへと、ページを開けさせずにはいられないような絵を描かなければ」と語り、何より本を手にする子どもたちの気持ちに届くよう心を砕いていたのでしょう。この本の原画の多くには鉄が入れられ、人物や背景の配置に思案を重ねた跡が残っています。

**忘れえぬ少女の心—『となりきたこ』**

ちひろの幼い頃と同じ愛称の少女“ちいちゃん”を主人公とした絵本シリーズの3作目です。隣に引越してきた少年に、初めは反発しながらも、一緒に絵を

描いたり、怪獣ごっこをして遊ぶうちに次第に打ち解け、大の仲良しになるまでの、少女の心の変化が描かれています。幼い頃、ちひろは実際に、隣の家の少年と垣根越しに遊んでいたといっています。ある日、少年に渡された絵雑誌「コドモノクニ」に描かれた初山滋や武井武雄の絵に心躍らせたちひろは、「もっとたくさん本を見せてもらわなくてはならない」と隣の家に遊びに出かけるようになります。けれど、その時は、どうしても見せてほしいと言い出せなかったと記しています。この年代特有の多感な少女の心を、ちひろは生涯忘れませんでした。この絵本シリーズについて、「あれはみんな私の思い出というか、心のなかにあるものです。」と語っていたように、戸惑いながらも、遊びを通して少年と心を通わせていく主人公の姿には、ちひろが持ち続けていた少女の心が投影されています。

「自分の中には、たくさんの子どもの住んでいる。○○ちゃん出てらっしゃい、という、その子が出てくる。」と語っていたちひろ。子どもの情景を捉えた作品には、ちひろの心の中に生きる子どもたちや、幼い頃のちひろ自身の姿が伺えます。そして、そこには、子どもたちの未来を願う、母親としての普遍的な思いが込められています。ちひろが描いた子どもの遊びの情景の数々をお楽しみ下さい。（宍倉）

●展示室3・4

ちひろ美術館コレクション画家展 I

## クラウス・エンヅィカート

●2008年5月16日(金)～7月8日(火)

クラウス・エンヅィカートは東ドイツのベルリンに生まれ、国営の広告美術会社でお菓子のパッケージなどを手がけるうちに、偶然に本の表紙を描く依頼を受けます。その後、応用美術専門学校で教鞭をとるようになってからは、本の仕事に専念していきます。絵本のデビューは1966年。以降、100冊以上の本や絵本のためにイラストレーションを描き、ドイツ国内の賞はもとより、国際アンデルセン賞画家賞を含め、数々の絵本の賞を受けています。

エンヅィカートの作品の魅力は、羽根ペンを使った緻密で克明な黒い線で描き出された写実性と、そこに表されている非現実的な状況です。その画風は、彼の好

きな16世紀のドイツのアルブレヒト・デューラーの版画や、影響を受けたと語る20世紀のフランスのジャン・グランヴィル等の絵を彷彿とさせます。彼はヨーロッパの本の伝統を引き継ぎながらも、独自の新しい発想を加えた作品を生み出し続けていると言えます。

今回は、彼の絵本の中から、『4人の子供、世界をまわる』を中心に展示します。原作は、『ナンセンスの絵本』で知られるイギリスのエドワード・リア（1812-1888）。4人の子供もたちが船を漕ぎ出し、さまざまな奇妙な場所を巡る、冒険の話です。

エンヅィカートは、非の打ち所がなく、ただきれいなだけの絵を嫌い、どこか

不自然で、緊張感や矛盾を含む絵を描くことを好みます。その絵が、不安定な気持ちを読者に呼び起こし、より深くストーリーについて考えさせることに繋がる、と信じているからです。そのため、彼の絵は甘さとは無縁です。しかし、注意して見ていくと、細部にまでさまざまな発見があり、更なる探求を読者に促します。絵本の文章も自らの手によるカリグラフィ（西洋の書道）を用いることが多いエンヅィカートは、書体も描く絵本によって、変えています。絵を囲む縁まで自ら描き、絵と文字を総合的にとらえた彼の絵本は、職人的な技術の高さとデザインのセンスの豊かさを感じさせます。

（松方路子）



図1 絵をかく女の子 1970年



図2 「このあしたん」 1967年



図3 大きな時計をつくる子どもたち 1957年  
『みんなでしようよ』(福音館書店)より

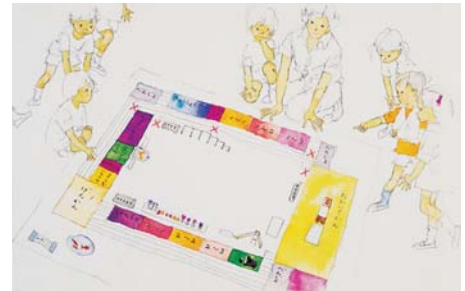


図4 学校の地図を見る先生と子どもたち 1970年  
教科書『しょうがくしゃかい』たろうとはなこ(日本書館)より



図5 そっぽを向く少年 そっぽを向く少女 1970年  
『となりにきたこ』(至光社)より



①



②



クラウス・エンツィカート  
①、②『4人の子ども、世界をまわる』より  
1992年  
③『小石ちゃん』より  
1974—75年



③

～同時開催～  
—ちひろ美術館コレクション—  
世界の絵本画家展 I

世界29ヶ国173人による作品(2008年1月現在)のなかから選んだ、荒井良二やジョン・バーニングムなど、世界の画家たち41人の作品約100点をお楽しみください。



クワイエタ・パトウスカー(チェコ)  
猫 1979—85年

## 台北国際ブックフェア報告

●2008年2月14日(木)~2月18日(月)

2008年2月14日から18日までの5日間、台湾の首都台北で国際ブックフェアが開催されました。ちひろ美術館は、開館30周年を記念し、ブースを出展、東京と安曇野両ちひろ美術館の活動やその理念を紹介しました。

会場は、台北国際見本市会場。台湾や日本を含め世界各国の出版社が集まりました。ちひろ美術館のブースは、インターナショナル・エリアの一角。ブースの壁には、いわさきちひろの代表作「赤い毛糸帽の女の子」の絵を中心に、美術館やコレクション、活動を紹介したパネルを設置し、ピエゾグラフ作品や絵本とともに展示しました。また、入口では、ちひろ美術館の30年のあゆみを紹介するDVDを上映。中国語版の美術館紹介冊子を配布しました。16日には、松本猛安曇野ちひろ美術館館長を迎えて、ブースの中でティーパーティーを開催、台湾の絵本作家や編集者との交流を深めました。翌17日には、アクティビティ・ステージで、画像を使いながら美術館紹介のプレゼンテーションも行いました。

多くの台湾の人にとって、いわさきち

ひろは初めて出会う画家です。けれど、「ぼくは、この絵は大好きです。」とか、「はじめてだけど、本当に素晴らしい絵よね?」と言った声が次々に寄せられ、反応の強さに驚かされました。また、台湾の出版社からは、翻訳出版を希望する声も。現在、台湾で出版されているちひろの絵本は、『ひさの星』『おふろでちゃぶちゃぶ』『もしもしおでんわ』『あかちゃんのうた』ですが、今回新たに、『ぼちのきたうみ』『戦火のなかの子どもたち』『ちひろBOX』等の翻訳出版が話題に上りました。こうした状況は、改めて、台湾の人たちの絵に対する感性が、私たち日本人とも近いものであることを教えてくれます。

台湾は、日本が1895年に清国から割譲を受けるまでポルトガル、オランダ、清国からの隷属状態がつづきました。割譲後、日本は武力支配を行いました。その一方で、産業の育成や交通機関の整備、日本式ではありましたが教育施設の設置等々を行いました。その歴史は、不幸な戦争を経てもなお、今日、年配の方たちを中心に、日本の美術や文化への強

い関心として表れています。ちひろの作品は、根底に水墨画や書といった中国美術の影響があります。台湾で長年ちひろの紹介をしてきたという絵本画家、鄭明進さんに「ちひろは若い頃、書をやっていましたので…」と話すと、「それは中国では普通のこと。画家は書もやります。書と画は一体ですから。」という話が戻ってきました。共通する美術の源流が、はじめて出会う台湾の人たちにも、ちひろの世界が受け入れられる所以といえるのでしょう。今回の活動は、未来に向かって、新しい絵本と文化の創造に繋がる交流の一步であったように思います。

(竹迫祐子)



ブース内での交流会

## 友の会交流会報告

●2008年3月2日(日)

年に一度の友の会交流会が、今年も東京館にて行われました。

### 第一部：「ちひろ美術館30周年の歩み」DVD上映会（初公開）

開館当初の美術館の様子が映し出されると、懐かしさ溢れる歓声に会場は包まれました。また、東京館の改築後の映像や安曇野館10年の記録をご覧になりながら、「美術館としての活動の幅が年々広がってきている」とお話される方もおり、長い間応援して下さった会員の方ならではの感想をいただきました。

### 対談：「ちいちゃんの絵本」

本交流会の特別企画は、絵本制作者・武市八十雄氏（至光社代表）と、松本猛（ちひろの長男／安曇野館館長）の対談。武市氏はちひろと共に「絵で感じる絵本」づくりに取り組み、絵本の新たな可能性を切り開いていかれた方です。「ちいちゃんの絵本シリーズ」の中から『ぼちのきたうみ』の読み聞かせ（至光社・小沼氏）を皮切りに、当時の制作秘話など、2人の対談の一部を紹介します。

**武市：**ちひろさんが「赤ちゃんのくるときって、なんか怖いような怖くないよう

な、不思議な感じよね。ちょっとそんなのやってみるわ」とおっしゃられて、後はご本人が好きのように描いてもらいました。でも時々とんでもないことをされて。私が申し上げたのは、“雑然な美”と“整然の美”があるから使い分けようと。ひらめく先からやっていこう。全ては未完成だけど、未完成なうちにこそ美は宿ると申し上げた。

ちひろさんは「それは一生忘れないわ」と書きとめていらした。“不確かながら確かに”と、要するに“雑然な美”“未完成の美”なんです。習作では本にならなかった絵にも、面白いものが沢山あります。ある意味では不確かですよ。不確



対談の様子 左：武市八十雄氏、右：松本猛  
(撮影：中川敦玲)

かだけど、確かな気持ちは伝わってきます。ラブレターなのです。本当に生きた鮮度というものを大切にされたのです。

ちひろさんは深いものを追求めていましたね。そして本当に優しい方でした。いつもお互いにこの絵本が最後と、不思議ですがそう思っていたのです。だから思い切って遊んだのです。遊んで下さったんです。ちひろさんも。

**松本：**今まで母が持っているものじゃないものが、武市さんと遊んでいるうちに出てくるのですね。

母が「今の世の中、いろんなものが失われているでしょう。とても素朴なんだけどたいせつなもの。それが絵本の中にはあるんです。」と書いています。絵本の中にあるものは、子どもが楽しんでもらってももちろん良いのですが、実はひょっとしたら、我々大人がもう一回読まなきゃいけないものもあつたりしますね。

最後に参加者の感想をご紹介します。「大人になっても“読み聞かせ”して頂くというのは嬉しいですね」「武市さんのお話に出てきた“未完成の美”のお話、子育てにも活かしていけたらと思いました」「目の前にある現実から発想を変えたり、素直にものを見直す心”など多くのヒントを頂きました。」（大滝智子）

# ちひろを 訪ねる旅②

## ソビエト 第五回世界婦人大会



ヤルタにて、植物園で出会った少女とともに  
(1963年7月)

1963年6月11日、いわさきちひろは、横浜港からソビエト客船オジョルキーゼ号で、ソビエト東南端のナホトカ港をめざし出航します。6月24日から29日まで、首都モスクワで開催される第5回世界婦人大会に参加するためでした。横浜港には、夫、善明と長男の猛をはじめ、妹や姪も見送りに来て、出航する船にテープを投げ、旅の無事と幸運を祈りました。

この大会には、日本からも41人の代表団が参加しています。ちひろは、日本の婦人運動の先駆者のひとり、榎田ふきの誘いで代表団に加わりました。一行は、横浜を出て3日後にナホトカ港に到着。そこからモスクワ、タシケント、

レニングラートの各地を視察し、6月22日にモスクワに戻り、世界大会に参加しています。大会は、大きな盛り上がりを見せ、「あらゆる信条・人種を越えて、世界平和をかちとろう」という平和アピールを採択して幕を閉じました。

その後、一行はさらにヤルタ、モスクワ、イルクーツクを回り、ハバロフスク、ナホトカを経由して帰路につきます。40日に及ぶ長旅でした。

この年、ちひろ夫妻は下石神井の家に、アトリエと夫婦の寝室、猛の部屋と茶室を兼ねた和室の4部屋を持つ二階を増築。一階を改装して、夫・善明の両親を向かえて同居生活をスタートさせます。

ちひろ44歳、善明38歳、長男猛12歳、小学校6年生でした。

ちひろにとって、このソビエト旅行は、かつて中国東北部(旧満州)の大連や勃利で暮らした経験を除けば、はじめての本格的な海外旅行でもありました。日常の家事や、夫や子どもの世話、忙しい仕事から離れ、ちひろは多くの公式行事の合い間を縫って、精力的に200点にも上るスケッチを描いています。各国の婦人代表はもとより、訪問地で出会った子どもたち、街角の暮らしの一コマなどなど。それらのスケッチからは、画家いわさきちひろの解き放たれた生き生きとした感性が感じられます。(竹迫祐子)

## ひとこと ふたこと みこと

### 3月6日(木)

展示作品の中に自分がいました。友達も家族も恋人も、ちひろさんの絵の中にいるのだと思います。

### 3月7日(金)

まだ暗い時間に始発にのってから、山をこえ山をこえ5時間、ようやく到りつきました。電車から降りるとあたりに雪がのこっていて、めったに雪の降らないところからきたのできれいでうれしかった。ちひろさんの絵の中には春がいっぱいですね。早く、春にならないかなあ。ちひろさんの絵をみると本当に幸せな気持ちになります。

### 3月11日(火)

小さいころから、いわさきちひろさんが大好きでした。今日は、お腹の赤ちゃんと一緒に来ました。この子にも、私の好きなちひろさんの素敵

であたかい絵を見せてあげたくて。ぼこぼこ動いて喜んでくれているようです。生まれたら、ちひろさんにちなんだ名前を付けてあげたいと思っています。

### 3月23日(日)

こども病院に3ヶ月入院している次女を今日は夫に看てもらい、春休みのひととき、長女とふたり、穏やかな気持ちで過ごさせていただいています。こども病院にもちひろさんの絵がいたるところに飾られ、気持ちを和ませてくれます。やさしい春の花…いいですね。

### 3月30日(日)

春色探しの旅に、家族4人で遊びにきました。とてもステキな絵と出会い、心がほっこりしました。最高です!

### 生誕110年記念初山滋大回顧展

初山滋の線が好きでした。年に4回仲間内で当番制にて一人の絵本作家を取り上げて勉強会を開いています。さて3月は私、誰にしよう。やはり、初山滋だろうな。どこから入っていいかと思っていたら、徳間書店のミニ紙に竹迫さんのコラム、東京へは都合がつかず、当館の開館を待ってようやく原画に会えました。どんな印刷本も、やはり原画に勝るものはありません。良い勉強会が開けそうです。感謝します。

### 3月4日(火)

初山滋さんの絵は目から入って体の芯まで貫くような強さがありますね。色の美しさと形の美しさ、「すごい!」と思って見入っていたら、あっという間に時間がたちました。ありがとう。



## 美術館 日記

### 3月1日☀

ちひろが好きだったとんかつ茶づけ「すずや」(東京・新宿)の苺のパパロアがカフェの新メニューで登場。「すずや」から50年前のレシピを頂き、当時の味を再現した。「素朴だけれど、やわらかくてやさしい色と味のパパロアは母との思い出の扉を開く」と松本猛館長は感慨深げ。初日はマスコミ各社から取材を受け、お客様からは「おいしい!」と評判も上々。

### 3月7日☀

兵庫県豊岡市の伊藤清永美術館で「わたしが選んだちひろ展(豊岡)」が開催された。豊岡市のみなさんから集まったメッセージとピエゾグラフ作品100点が一緒に展示される参加型の展覧会。開幕直後には、地元の方先生方を対象にしたギャラリートー

クも開催。同館のスタッフからは、日頃、美術館に来ないお客様や幅広い年齢層の方々を迎えられたと喜びの声。ちひろの平和への願いが込められた『戦火の中の子どもたち』の反響が大きかったことが感慨深い。

### 3月16日☀

スライドトーク「色彩と線の詩人・永遠のモダニスト 初山滋」を竹迫祐子副館長が行なった。初山滋という画家の人と成りを伝える内容に「興味がいよいよわいた」「この年になって改めて美術の面白さを認識しました」との感想が寄せられた。

### 3月20日☀

昨年に引き続き、入場無料・ワンドリンクサービスの感謝デイを開催。曇り空の中、2309人の方にご来館頂けた。午前と午後の2回行われた「うたごえ喫茶」のイベントでは、世代

を超えた名曲をご年配の方も若い方も一緒になって声を合わせて歌っていたのが印象的だった。お客様からは「あっという間に時間が過ぎた。」「大いに満足です。」「次回を期待しています。」との嬉しい感想に、スタッフ一同、元気をいただく。

### 4月6日☀

3月末より新商品「ちひろバッグ」が登場。愛らしいデザインが好評と、早々に新聞でも掲載される。アートディレクションはグラフィックデザイナーの佐藤卓氏。現在、展示中の作品「花の輪のなかでおどるふたり」をモチーフに、デザインされたバッグには、春らしい色とりどりの花や蝶が舞っている。A4サイズが入り、ポケットやマチが付いた丈夫なビニールバッグは実用的と、日ごろから荷物持ちの女性には好評。



●次回展示予定 7月11日(金)～9月23日(火)

<展示室1> ちひろ・夏のパレット



貝と赤い帽子の少年 1970年

まぶしい日差しを浴びる少年、海辺を走る女の子。ちひろは、夏の子どもたちの姿や情景を、目に映る色にとらわれず、感じるままに表現しています。本展では、ちひろの色彩の魅力に注目し、夏の季節感溢れる作品や絵本『にじのみずうみ』等を紹介합니다。

<展示室4> ちひろ美術館コレクションー世界の絵本画家展Ⅱ

世界29カ国173人約26000点(2008年1月現在)の作品から、約100点を選んで展示します。また、コレクション画家展として西村繁男の作品をまとめて紹介します。



西村繁男 『にちよういち』より 1979年

●6/21(土) 日本の名画上映会  
(協力: NPO法人シネマネットジャパン)

日本の古きよき名画のひとつ、鞍馬天狗シリーズから1作品を上映いたします。河崎義祐監督のお話とともに楽しみください。

- ◆上映作品:「鞍馬天狗 決定版 鞍馬の火祭」(1951年/日本/92分)  
※DVDでの上映となります
- ◆出演: 嵐寛寿郎、美空ひばり、入江たか子、岸恵子、黒川弥太郎
- ◆監督: 大曾根辰夫
- ◆ストーリー: 嵐寛寿郎、美空ひばり出演で贈る、百鬼夜行の京の巻。
- ◇日時: 2008年6月21日(土) 14:00～16:00
- ◇会場: 安曇野ちひろ美術館 多目的ギャラリー
- ◇参加費: 無料  
(展示をご覧になる方は別途要入館料)
- ◇お申込方法: 安曇野ちひろ美術館 (0261-62-0772) まで



●原語で楽しむおはなしの会ードイツ語で絵本を楽しもう!ー



クラウス・エンツィカートの『4人の子ども、世界をまわる』表紙 1992年

ドイツの画家、クラウス・エンツィカートの絵本『小石ちゃん』『4人の子ども、世界をまわる』の原語による読みきかせを行います。繊細な線や完成された本のデザインとともに、ドイツ語の美しい響きをお楽しみください。

- ◇日時: 2008年6月7日(土) / 7月5日(土)  
いずれも13:00～13:30
- ◇会場: 安曇野ちひろ美術館 展示室4
- ◇参加費: 無料  
(展示をご覧になる方は別途要入館料)
- ◇お申込方法: 予約不要(当日参加可)

●おはなしの会

毎月第2・4土曜日 11:00より  
絵本の読み聞かせや素話を、親子でお楽しみいただけます。どなたでもご自由にご参加いただけます。

●絵本相談室

毎月第2・4土曜日 11:30より  
絵本に関する相談や、絵本選びのアドバイス等、絵本に関するお問い合わせを承ります。

●ギャラリートーク

毎月第2・4土曜日 13:00～/14:00～  
展示室にて、作品の解説や展示の見どころ、絵の楽しみ方などをお話します。

CONTENTS

- <展示紹介> ちひろ・あそびの情景 / ちひろ美術館コレクション画家展Ⅰ クラウス・エンツィカート……②③
- <活動報告> 台北国際ブックフェア報告 / 友の会交流会報告……④
- ちひろを訪ねる旅⑧ / ひとことふたことみこと / 美術館日記……⑤

美術館 / 友の会だより No.51 発行2008年5月9日

● 安曇野ちひろ美術館